

## 2019 年度 推薦入試 1 期 小論文

次の文章を読み、設問に答えなさい。

「欠点ばかり見る指導者」

大人が子どもと積極的に関わっていない。

日本で子どもたちを指導する大人に出会うにつれ、そう感じるようになりました。小学校や地域のサッカーチームの練習に参加すると、タッチラインの外で腕を組んだまま、微動だにしない指導者がたくさんいます。

練習のはじめにメニューや目標を発表した後は、じっとコートを見つめるばかり。その姿は監督やコーチというより、まるで見張りか時間を計るためだけにいるかのようです。決められた時間内に最低限の仕事だけやって、おしまい。日本では指導者は教え子たちと一線を画すべきという精神的な文化が存在するのかもしれませんが、しかし、「この方法で子どもたちとよい関係が築けるのかな」と不思議に思いました。

最初から最後までフィールドに入って声をかけることさえせず、当然スキンシップなど皆無。子どもたちがせっかくだいいプレーしてもうなずくだけで、プレーへのフィードバックがありません。そうかと思えば、一見、熱心な指導者たちが、子どもたちのミスをあげつらい、これでもかというほどに怒鳴る声のなんて多いことか。練習中に何度「そうじゃない!」「ダメだ!」という言葉聞いたことでしょう。

もちろん、どの国にもミスを指摘したり、とがめたりする指導者は存在します。私はそれがいいことだとは思いませんが、選手の間違いを修正しなければと思うのは指導者の自然な性<sup>さが</sup>ですし、起こったミスにとっさに反応するのは簡単な指導法なのです。

それにしても、日本の指導者はあまりにもネガティブなことばかりに目がいきすぎるし、子どもを罵るような言葉が多すぎます。そのせいで、フィールドの子どもたちはミスをして叱られないように、そればかり気にしてプレーしているように見えます。

「なるほど、初対面の私に、必要以上にビクビクしていたのもこのせいか」と思いました。かわいそうに、子どもたちは日本代表チームの監督が来ると聞き、期待すると同時に、どれだけ厳しい指導があるのかと、さぞかし怖かったことでしょう。

多くの子どもたちがもつ「ミスなし思考」は、大人の選手にも見られます。日本の選手は、まず無難なプレーをしようとし、彼らの最終目標は勝つことではなく、ミスをしていないことなのではないかと思えるほどです。試合が終わったら「やったー!今日はミスがなかった!」と喜びの声をあげるのではないか…。冗談ではなく、私は本気でそんなふうを感じることはありませんでした。残念ながら、これでは勝利を手にするのは難しいでしょう。

日本では、「うちのチームの課題はメンタル」という言葉をよく耳にします。しかしその問題をつくっているのは誰でもない、指導者自身であることも多いのです。

もしも子どもたちにスポーツの楽しさを教え、チャレンジすることの素晴らしさを経験させたいなら、そして、自ら決断できる選手に育てたいと思うなら、始終時計とにらめっこをしてミスをあげつらうだけの指導者は、今すぐに考えを改めるべきです。

(ミゲル・ロドリゴ 『ミゲル流 人生を切り開く 「自信」のつけ方』より抜粋)

[設問]

- 問 1. この文章で筆者が伝えたかったことを 250~300 字で述べなさい。
- 問 2. 筆者が伝えたかったことに対してのあなたの意見を 500 字以内で述べなさい。